

国家・部族・アイデンティティー

——アラブ社会の国民形成——

酒井啓子編

国家・部族・アイデンティティー

——アラブ社会の国民形成——

酒井啓子編

アジア経済研究所

研究双書 No.427

酒井啓子編『国家・部族・アイデンティティー ——アラブ社会の国民形成——』

英文表題および目次

Title

Kokka, Buzoku, Aidentiti : Arabu Shakai no Kokumin Keisei
(Social Identity and National Formation in the Arab World)

Edited by

Keiko SAKAI

Contents

Introduction Social Identity, Tribalism and the State in the Arab World
(Keiko SAKAI)

Chapter 1 Tribal Consciousness ('aşabtya) as National Identity :
the Case Study of Saudi Arabia
(Toshio TOMIZUKA)

Chapter 2 Social Networks and State Formation in Iraq
(Keiko SAKAI)

Chapter 3 The Development of National Identity in Jordan
(Yoshiyuki KITAZAWA)

Chapter 4 The Emergence of the National Identity in Bahrain
(Kazuo TAKAHASHI)

Chapter 5 The Significance of 'Urūba in the Sudan
(Yoshiko KURITA)

Supplement Turkish Nationalism : Contribution for the Comparative Study
(Kaoru MURAKAMI)

[Kenkyū Sōsho (IDE Research Series) No.427]

Published by the **Institute of Developing Economies**, 1993
42 Ichigaya-Hommura-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162, Japan

国家・部族・アイデンティティー
——アラブ社会の国民形成——

さかい けいこ (アジア経済研究所総合研究部 中東総合研究プロジェクト・チーム)
酒井 啓子
とみづか としお (四天王寺国際仏教大学教授)
富塚 俊夫
きたざわ よしゆき (中東調査会研究員)
北澤 義之
たかはし かずお (放送大学助教授)
高橋 和夫
くりた よしこ (東京都立大学助手)
栗田 禎子
むらかみ かおる (アジア経済研究所総合研究部 中東総合研究プロジェクト・チーム)
村上 薫

—執筆順—

国家・部族・アイデンティティー
——アラブ社会の国民形成——

研究双書427

1993年3月5日発行©

定価3605円(本体3500円)

編者 酒井 啓子

発行所 アジア経済研究所

東京都新宿区市谷本村町42 電話 東京(3353)4231(代)

発売所 アジア経済出版会

東京都新宿区市谷本村町42 電話 東京(3353)1640

FAX 東京(3357)0435

振替 東京-5-143692

印刷所 メディカ・ピーシー

ISBN4-258-04427-X C3033 P3605E



IDE

定価3605円(本体3500円)

ISBN4-258-04427-X C3033 P3605E

目 次

はしがき

序章 国家・部族・アイデンティティー……………	酒井 啓子 … 3
第1節 アラブ社会における「近代・国家」システム ……………	3
第2節 「近代・国家」システムと伝統社会 ……………	7
第3節 「部族」社会に関する若干の考察 ……………	13
第4節 本書の構成 ……………	19
第1章 ナショナル・アイデンティティーとしての 部族意識 —サウディアラビアを中心に— ……	冨塚 俊夫 … 29
はじめに ……………	29
第1節 国家への帰属意識とアサビーヤ ……………	32
1. 統治支配層と部族勢力 ……………	32
2. 半島と部族主義 ……………	38
3. サウディ人の自己認識のパターン ……………	43
4. 部族的忠誠心と国家に対する忠誠心 ……………	44
第2節 遊牧部族の定着化に対するサウド家の諸政策 ……………	47
1. アラビア半島平定・統合の秘密 ……………	47
2. 第1の実験：「イフワーン団」の創設 ……………	49
3. 第2の実験：巨大農業プロジェクトの実施 ……………	54
4. 第3の実験：部族の領域の排他的権利の廃止と、 部族への土地分配に関する2つの勅令 ……………	55
5. ジュハイマンの反乱と土地問題 ……………	58
6. サウド家の遊牧部族への抜き難い不信感 ……………	59
第3節 サウド家の直面する部族問題 ……………	60
1. 地方行政機構と族長制の伝統 ……………	60

2. 政策決定過程への参画システム	64
3. 地方分権化と部族問題	68
4. 反体制派勢力としての部族	69
おわりに	70
第2章 イラクにおける国家形成と政治組織	
(1908~20年)	酒井 啓子 … 79
はじめに	79
第1節 オスマン末期から英国支配に係るイラクにおける	
政治活動の概観	83
1. イラク地方の初期政治活動 (1908~18年)	83
2. 反英抵抗運動に至る政治活動 (1918~20年)	87
第2節 各政治組織のネットワークと「国家」意識：	
既存の伝統的ネットワーク	96
1. 部族的ネットワーク形成	98
2. 宗教的ネットワーク形成	102
第3節 政治組織における重層的ネットワーク形成	107
1. 個人の権力基盤をもとにしたネットワーク形成	108
2. 切り離された「イラク志向」	112
3. 伝統的ネットワークの連合体としての「イラク志向」	120
おわりに	129
第3章 ヨルダンの「国民」形成	北澤 義之 … 143
—トランスヨルダン成立期を中心にして—	
はじめに	143
第1節 トランスヨルダンに先行する社会状況	145
1. オスマン帝国統治下のトランスヨルダン	145
2. カラクの反乱	156

第2節	トランスヨルダン政府の成立	161
1.	概観	161
2.	トランスヨルダン期の内閣	164
第3節	支配の正統性と地元勢力	168
1.	「国民」意識の萌芽	169
2.	「アラブ軍団」の発展	175
	おわりに	178
第4章	バフレーン人の誕生	高橋 和夫 … 187
第1節	バフレーンの社会構成	187
第2節	バフレーン近代史における宗派意識	192
1.	英国によるバフレーン介入の経緯	192
2.	アラビア半島との関係を巡る問題	195
3.	教育制度の改革	198
第3節	民族主義とバフレーン「国民」意識	200
1.	ベルシア民族主義の影響	200
2.	青年運動と石油開発の持つ意味	202
3.	2つのアイデンティティーの相克	203
4.	「バフレーン人」アイデンティティーを洗う波	205
第5章	スーダン史上におけるウルーバの 意味の変遷について	栗田 禎子 … 209
	はじめに	209
第1節	前近代スーダンにおける「アラブ」・「黒人」 差別の図式	212
第2節	19世紀スーダンにおける「ウルーバ」の意味の不在	218
第3節	英統治下スーダンにおける「ウルーバ」の諸相	223
第4節	独立後のスーダンにおける「ウルーバ」	231

おわりに	237
補章 トルコ・ナショナリズムに関する一考察	村上 薫… 245
—代表的研究の解題—	
はじめに	245
第1節 近代化論的アプローチ	247
1. 初期のトルコ近代史研究	247
2. ルイスの研究：ナショナリズム形成の通説	249
3. ベルケスの研究	255
第2節 ルイスとベルケスの視点，およびその限界	258
第3節 近代化論をこえて	263
1. 1970年代以降のトルコ近代史研究	263
2. 新井の研究	265
3. ランドーの研究	268
おわりに	271
主要用語解説	277

凡 例

本書では、アラビア語の転写・表記について、次の原則に従った。

1. ローマ字での転写文字は、アラビア語のアルファベットの順に, ' , b, t, th, j, h, kh, d, dh, r, z, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ḻ, ' , gh, f, q, k, l, m, n, h, w, y, を用い、定冠詞、助詞等を除く語頭を大文字に記した。
2. 母音は a, i, u, 長母音は ā, ī, ū, 二重母音は ay, aw と転写する。
3. 語頭のハムザ、語末のター・マルブータは省略する。
4. 定冠詞は、後続太陽文字との同化の有無にかかわらず、常に al- と転写する。カナ表記に関しては、必要な場合のみ同様に「アル」と表記するが、同じ固有名詞が繰り返される場合や煩雑と思われる場合には、これを省略、ないし後続太陽文字と同化した形で表記した(例:「アルオタイビー」→2度目以降は「オタイビー」)。
5. アラビア語引用文献のローマ字転写においては、その書名に邦訳を記した。
6. カナ表記については、できるだけ現地の発音に近い表記としたが、一部混乱を避けるために、慣用的に用いられている表記を使用した(例: Makka →メッカ, urdun →ヨルダン)。また一部トルコ語、ペルシア語などアラビア語以外を語源とする単語については、アラビア語のローマ字転写表記と異なる場合がある(例: Bājahjī →パチャーチ)。